

2022年「4・13 根津山小さな追悼会」のご報告

4・13根津山小さな追悼会は、お陰さまで今年で第29回を迎えます。

昨年2022(令和4)年第28回追悼会は、新型コロナウイルス感染症対策を徹底しながらも、久しぶりに通常の規模で追悼会を開催することができました。式次第も、「花」斉唱を割愛させていただいた以外は、これまで通りの進行内容で開催いたしました。引き続き「参加はご無理をせずに」と呼びかけて開催しましたが、一昨年を超える総勢約140名が参加してくださり、空襲犠牲者を追悼し、平和への祈りを捧げることができました。

コロナ禍だけでなく、世界規模の平和や経済、環境など大きな問題を抱える昨今にありながら、かつての戦争を忘れず、空襲犠牲者の鎮魂と平和を祈る追悼会にご参加、お力添えくださり、深く感謝申し上げます。

今後とも皆さまにご参加いただけるよう力を尽くして参ります。どうぞ、今後ともお力添え、ご参加くださいますよう、よろしく願い申し上げます。

4・13 根津山小さな追悼会実行委員一同



花



【城北大空襲被災体験のご紹介】

岡本邦夫さん「戦時小国民」は、『平和の像建立記念誌』（平成3年3月 豊島区総務部総務課発行）に掲載されたものです。開戦から戦中の生活、度重なる空襲、そして終戦の日までが書かれています。

佐藤全子さん「城北大空襲 荒川区尾久にて」は豊島区に隣接する荒川区尾久での空襲被災体験です。佐藤さんは、昨年初めて追悼会に参加されてから寄稿してくださいました。

戦時少国民

岡本邦夫（豊島区千早在住）

断片的に思い出す太平洋戦争中の出来事は昨日のように蘇えるのに、順序立てて思い起そうとしますと、曖昧になってしまいます。あまりに命がけの毎日だったからでしょう。

昭和10年生まれの私は、太平洋戦争に突入した年、長崎第二国民学校（要町小学校）へ入学しました。当時の流行語、銃後を守る少国民だったのです。校門を入ると校舎正面の左側に奉安殿があって、毎朝最敬礼をしてから教室に入りました。大きくなったら航空兵になると心に誓い、常勝日本を教育され「撃て止やまむ」などと訳の判らない戦意昂揚標語を聞きながら精一杯生きていました。

昭和17年も何とか戦勝の声の中、若い先生方は出征兵士として戦場へ駆り出されて行きました。校庭では兵隊送りが度々あり上級生の女子が泣いているので胸がつまりました。近所では16才の兄さんが、少年兵に志願して「何と立派」などと大人の話聞いて過してきました。

この年、シンガポール陥落記念のゴムボールが配られたり、桑皮繊維で作られた国防色の学生服も抽選して順番に配給されました。むろん運動靴も抽選配給でしたが、私の番なのに友達に泣いて取られて、後に担任の先生が謝罪に来られたこともありました。

昭和19年に入ると、戦局もいよいよ悪化して三年生以上の生徒は学童疎開が始まり、生徒数が減少して淋しい教室になりました。

長崎第二国民学校の子供は、山形県の寺へ集団疎開しましたが、ある友達は泣き続けているとか。その母親は、私に東京を思い出すので慰問の手紙は書かぬよう頼みました。後に親が汽車の闇切符を買い連れ戻し

たそうです。なかには疎開した我子を、心配のあまり病に臥した母親もいました。

未疎開の私は先生に責められましたが、夜尿症との理由を作り、書類を提出して逃れました。母親の里、埼玉県も米軍の艦載機が飛来して、畑仕事の人達に機銃掃射をするようになりました。村人も縁故疎開の東京モンを日がたつに連れ、うとましく思うようになり、私は行く時期を失いました。幼馴染の畳屋のシロちゃん、焼芋屋のヒロちゃん、皆田舎へ疎開して、千早町を去りました。

JOAKでは「太郎は父の古里へ、花子は母の……」と歌っているのが悲しく聞えました。ラジオ解説は「成瀬寛次の戦う日本」などと隣組在住の聾唖学校長が放送をしていました。

この頃になりますと米軍機の飛来も頻繁で、警戒警報のサイレンが鳴る時点では既に上空は、爆音が唸っていました。紺碧の空を白く透き通ったB29の周りに、板橋辺りから撃つ日本軍の高射砲弾が申し訳け程度ポンポンとさく裂して、ポップコーンのような煙りを散りばめていました。弾はとどかないのです。

空の風（しらみ）だったB29も白鱧程の大きさに見えるようになると、日本は負けるのかと、子供心に思うようになりました。

食糧は配給量が少なくなり、私達は雑炊を食べるのに、東池袋の根津山へ並ばされました。現在の恩田茶舗前バス停辺りに食堂があったような気がします。雑炊とは名ばかりで濁った塩湯の中に、何かが少し入っている怪し気な汁を半日も行列して、すすりました。

私の隣家は小料理屋で、空襲でも夜毎高級将校達がサイドカーで乗りつけ「ツーツーレロレロ……」と宴会に余念がありませんでした。あの騒ぎは何だったのか、料理の材料はいつ運び込まれていたのかと、今でも不思議でなりません。

やがて学校は完全に閉鎖されましたが、近所の教育者が、地蔵市場（千早一丁目）に売る品物が無く空いた場所を利用して、寺小屋を作り、子供を集めて勉強を教えてくださいました。あまり長い思い出ではありません。きっと短期間だったのでしょう。

ある日突然単発機が急降下しながら機銃を連射した事件がありました。池袋駅を狙ったそうです。それが切掛のように、空襲が度々重なり、夜 B29 の爆音が微かに聞えただけで飛び起きるようになりました。そして、ロッキード、グラマン等艦載機や爆撃機を、音で識別出来るようになってしまいました。

昭和 20 年春の夜、池袋地区も油脂焼夷弾で丸焼けになり、要町一丁目（現西福祉事務所裏）まで火が来ました。家まで 100 米です。

その夜、私は防空壕の中で震えて一夜を明しました。母が「これで私達も終りだろうから」と、湯飲み茶碗に入れてある、取って置きの白砂糖を舐めさせてくれました。壕の外から、ドヤドヤと人々が西の方へ逃げて行く足音が一晩中聞えていました。

以後、空襲の記憶はありません。8月15日の朝「大切な放送があるから必ず昼には帰れ」といわれたことと、軍需工場が罹災して仕事がなくなった中学生達が、小学校のプールを勝手に開放しているので、泳ぎにいったことを覚えています。暑い日でした。

被災当時：7歳・小学生／豊島区千早

城北大空襲 荒川区尾久にて

佐藤全子（豊島区上池袋在住）

「起きろ！」父の突然の大声に、びっくりして飛び起きた私は「あっ！」と思った。隣の家が火をふいて燃えているのだ。

この頃は空襲警報が鳴らなくなっていて、いつ焼夷弾が落ちて不思議でなくなっていた。すぐに逃げられるように寝間着は着ずに、普段着で寝ていた。

父は消防団員だったので消火活動に行き、母と私は家の防空壕に避難したが、中にいるのが怖くなり、母と二人で小台橋を渡ったところにある土管工場に急いだ。空襲を受けたときは、そこに逃げると決めていたからです。

しかし、小台橋の袂では、荷物がボンボンと燃えており、恐ろしくて渡れなかった。大勢の人が荷物を抱えたままでは橋を渡れないので、袂に捨てて行って、それが燃えていたのです。

あちこちに火の手が上がり、王電（現在の都電荒川線）のパンタグラフの架線が火の連なりになっていて、今にも頭の上に落ちてきそうだった。

暗いところは、まだ火の手が回っていないので、八幡神社の裏の道を通って、私が卒業した尾久小学校の校庭を目指して駆けていった。

熊野前駅まで来たときに、「小泉園」という大きな料理屋さんがあって、その屋根が焼夷弾で火の海となり、花火より綺麗だなと思ったが、バサッと焼け落ちて暗闇になった。一瞬の出来事だった。

校庭には大勢の人達が集まっており、丸くなって早く夜が明けるのを祈った。

その時、ポツポツと雨が降って来た。天井の無い校庭で雨が降ってきて困ったねと思った時、何か変な臭いがする。何だろうと周りの人たちと話していたら「ガソリンだ！」と誰かの大きな声がした。敵機がよく燃えるようにガソリンを蒔いたのだ。人々の顔にポツポツと跡がつき、異様な臭いに気分が悪くなってきた。幸いに焼夷弾は落ちてこなかったが、一発でも落ちれば集まっていた全員が丸焼けになったでしょう。

無事夜が明け始め、ほっとした私たちは、焼き尽くされて何もなくなった街を土管工場へと急いだ。父は近所の人達と焼けた材木を集めて焚火をしていたが、私達を見るなり「馬鹿野郎！」と一括した。約束の場所で必死に探したが見つからない。「これは死んだに違いない。この広い東京でどうやって探そうか。」と考えていたところだったそうだ。私たちの無事な姿を見て、嬉しさのあまり怒鳴ってしまったと。

その後の五日間、焼けたトタンや黒焦げの材木で屋根を作り、埋めてあった食料や食器を掘り出して過ごし、父の故郷である埼玉県に疎開した。

アメリカは日本の友好国というが、今でも「ガソリンの雨」は脳裏から離れない。戦争は人間を鬼にする。絶対に戦争をしてはならない。

被災当時：荒川区尾久

千川中学校 平和教育のご紹介

千川中学校では今年度2学年で平和教育の授業を行なっています。その取り組みの一環で、校長先生より地元の空襲について生徒たちに伝えたいと追悼会に要望があり、平和教育に参加させてもらいました。

地域の空襲を学んでもらう平和教育は、千川中学校体育館で2022年9月9日(金)4時限目、同中学2年生全員を対象に行われました。

前半は、城北大空襲についてスライド上映と資料を使って空襲の規模や被害について説明し、後半は空襲被災体験者の恩田嘉一さんにご協力いただきま

した。恩田さんは千川中学の近くにお住まいで、被災当時4歳10か月でした。2年生は当日1時限目に恩田さんの空襲被災体験を読んでいました。その上で、その当事者から直接当時の様子を聞くことができる経験は、戦争と平和に対して実感を持って学び考える良い機会になったのではないかと思います。

(4・13 根津山小さな追悼会 事務局長 吉田)

* 恩田嘉一さんの空襲被災体験は、2018年発行「被災証言集 第3集」に掲載されています。当時幼かった恩田さんが、今でも鮮明に覚えている忘れられない風景が語られています。

城北大空襲被災体験を語り継ぐ

4・13 根津山小さな追悼会 被災証言集

4・13 根津山小さな追悼会では、大きな空襲の中を今日まで懸命に生き抜いた方々の体験を記録し、次の世代に語り継ぐために、「追悼会十周年記念文集」「被災証言集第2集」「被災証言集第3集」を発行して参りました。一人でも多くの方々に読んでいただけるよう願っております。



被災証言集第2集 2014/3/25・B5版・本文モノクロ・114ページ・被災体験者証言地域図付き〈31名の空襲被災証言地域：雑司ヶ谷町・目白町・池袋・要町・日ノ出町・西巣鴨・巣鴨・駒込、隣接地域(板橋区弥生町)〉 目次：「四・一三空襲体験」田中久子、「被災後に役立った防空壕」峯岸静子、「火音の恐怖」きたまこと、「根津山に逃げた」田中不二、「四月一三日当日と戦中戦後の生活」坂上 明、「見つからなかった父の大工道具」小倉敦子、「戦争・空襲・終戦の青春時代」坂東和之丞、「学童疎開から戻って」河西弘子、「戦災に遭遇して」神戸美枝、「私と戦争(戦災の日のこと)」矢部喜美代、「焼け出され始末記」岡田和道他、●論文寄稿「城北大空襲とは何であったか？」青木哲夫



被災証言集第3集 2018/3/25・B5版・本文モノクロ・132ページ・被災体験者証言地域図付き〈38名の被災証言地域：池袋・雑司ヶ谷・目白町・高田本町・椎名町・長崎・堀之内町・西巣鴨・巣鴨、近隣区の四月一三日・五月二五日空襲、豊島区外の空襲・学童疎開・勤労働員など〉 目次：「根津山へ逃げた」峰岸郁子、「救護活動中に空襲で亡くなった父」剣持信子、「兄 井熊友弥の遺品を前にして」星 静江、「空襲の火に映える満開の桜 忘れない」越阪部文江、「燃える空と地の間で!! 一私の空襲体験」青山巖雄、「弟を背負って 巣鴨拘置所の原っぱへ」宮崎さと子、「炎の記憶」加藤宣彦、「跡形もなくなった自宅」坂本弘道、「四月一三日前後のこと」山本澄代 他、●論文寄稿「豊島区の学童疎開」青木哲夫

* 証言集は発行費用に相当するご寄付をお願いしております。どうぞお力添えをお願い申し上げます
「被災証言集第3集」1500円、「被災証言集第2集」1000円、「追悼会十周年記念文集」配布終了
* 送料は実行委員会が負担します * お問合せ、お申し込みは事務局へお願いします

4・13 根津山だより 2023・4 第4号 4・13 根津山小さな追悼会 【事務局】吉田 雅明 090-1663-4538